

“かずさの地にバイオの花を”

千葉県地域結集型共同研究事業 研究統括

かずさ DNA 研究所 所長兼理事長 大石道夫

フェーズⅢを残してはいるが、本研究事業は比較的成功裏に終わったと認識している。その最も大きな要因は、千葉県の多大なサポートによって運営されているかずさ DNA 研究所の研究リソース、研究技術、人員そして設備をコア研究室として最大限に利用できたことにある。そのお蔭で、本プロジェクトでは素晴らしいスタートダッシュをかけられた。また大型研究資金においてはしばしば見られるばら撒き型の資金配布に陥ることなく、コア研究室を中心として、研究の進捗及び成果の管理・運営が行なわれたことも、もう一つの大きな要因である。

バイオ関連の研究事業はそのイノベーションのタイムスパンの速さから、なかなか当初計画どおりに行かないことも多いように感じる。特に本事業のごとく5年間もの長きに渡りサポートを受ける場合、アウトプットは全く違うものという場合も稀でない。この点に関しては、ご多分に漏れず我々のプロジェクトでも、アウトプットはかなり違うものとなっている。ただし強調せねばならないのは、本プロジェクトにおいては当初計画を前倒しで達成し、必要な研究計画を随時追加しこなしてきたことである。具体的に言及すると、抗体の評価としての蛋白質相互作用の同定やヒト-マウス間での交差反応の解析などである。他にも多くの追加案件があるが、詳細は本文を参照されたい。研究統括として強調したいのは、研究者の要求に合わせたこのような研究計画の追加・変更に際して、常に事務方が迅速な対応をとり JST との交渉に臨み、全てを前向きに進めてくれたことである。この場を借りて交渉にあたった事務職員そして JST の担当者に深謝申し上げる。これら研究計画の変更で得られた成果は、特にフェーズⅢ以降、例えば抗体の販売においてその付加価値を高めるものばかりである。

最後に事業化展開に関しては、率直に言って少々不満が残る。既存の企業と提携しいくつかの商品化には成功したが、フェーズⅡ内の期間においては、バイオベンチャーなどを起こす事ができなかった。確かにバイオ特に最終的にヒトをターゲットとした哺乳類のバイオ関連事業は、その安全性や有効性が、植物などのそれより、より厳しく評価されるために簡単には事業化にまでは結び付かない。元来我々のプロジェクトは、将来的なヒト遺伝子解析のためのモデル生物でのリソース整備である。従ってこれだけでは大きな事業展開は難しい。本プロジェクトで整備したリソースと抗体アレイなど新たに開発した技術を駆使して、新規疾患原因遺伝子や治療のターゲットとなる分子を地道に同定してく作業も今後重要だろう。ただしこれらは個別の分子に特化した研究が必須なため、共同研究という枠で展開して行くしかない。幸い後継プロジェクトの一つであるゲノムネットワークプロジェクトは、個別研究が可能な多くの研究者との枠組みができていますので、今後大いに活用したいところである。そのような研究の継続で将来的に 2000 種を超える遺伝子の中から、産業に直結するつぼみを見つけ、このかずさの地で花開かすことがフェーズⅢでの我々の使命である。